

陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(1)

－中吉丸がつなぐ小友町と小笠原諸島－

中澤静男

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター (文化遺産教育研究部門))

新宮 済

(奈良教育大学大学院在学)

The First Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

－ The Nakayoshimaru Boat joins Otomo Town to Ogasawaha Islands －

Shizuo NAKAZAWA

(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)

Wataru Aramiya

(Graduate School of Education, School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市小友町の常膳寺で文化遺産調査を行ったところ、観音堂に安置されている薬師如来立像の胎内に墨書があることがわかり、さらに製作年と大願主及川庄兵衛という名前から、中吉丸の漂流事件と関係があるのではないかと予想された。天保十年11月15日に6名の乗組員を乗せて小友浦を出帆した中吉丸は、35日間の漂流の末、30名ほどの島民が住む島に漂着した。言葉は通じなかったが、親切な島民たちに助けられ二か月ほど暮らした後に、全員無事に帰国する。この中吉丸が漂着した島が小笠原諸島父島であった。本稿では、薬師如来立像と中吉丸、小笠原村を結ぶ地域の歴史を通して、地域を大切にすることを養い、持続可能な発展に関する価値観のひとつである人と人のつながりについて学ぶことを目的に、総合的な学習の時間におけるESD教材の開発に取り組んだ。

キーワード：持続発展教育ESD 東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami
教材開発 Teaching material creation 中吉丸 Nakayoshimaru Boat

1. はじめに

奈良教育大学では、陸前高田市在住の元新聞記者、及川征喜氏、元小学校長の佐藤文隆氏、陸前高田市教育委員会教育委員の松坂泰盛氏からの依頼を受け、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として調査チームを編成し、陸前高田市の文化遺産調査を行った。調査チームは、本学教員2名、大学院教育学研究科修士課程2名、専門職学位課程2名、学部生2名の8名である。そして、6月22日から25日、9月6日から9日の2回にわたり、陸前高田市を訪問し、同市小友町常膳寺に安置されている仏像の調査を行った。

調査の一つに仏像の胎内にファイバースコープを入れ、胎内にあるかもしれない文書や墨書を探すという

ものがあつた。常膳寺の仏像には胎内文書があるという言い伝えがあり、それを発見することができれば、東日本大震災津波で多くのものを失った陸前高田市民を元気づけることができるという、先述した陸前高田市在住の方々の依頼によるものである。

本稿では、常膳寺観音堂の薬師如来像の調査から発見された墨書を手がかりに、現地の方々へのインタビュー調査や文献調査に基づいて明らかになってきた陸前高田市と小笠原諸島との結びつきを小学校総合的な学習の時間の教材として開発した。そのことを通して小友小学校など、陸前高田市の小学生が地域の文化遺産を学び、地域の歴史に目を向けることで、地域を大切にすることを養い、持続可能で住み続けたい地域社会づくりの担い手を養うことに寄与したいと考えている。

2. 鶏頭山常膳寺について

常膳寺は気仙三十三観音霊場の二十七番札所になっており、中心的な建物である観音堂には、気仙三観音のひとつである像高324.5センチメートルにも及ぶ木造の十一面観音菩薩立像が安置されている。寺伝によると、常膳寺は寛文十一年（1671年）に祐圓によって開かれたと伝えられ、元は天台宗寺院であったのが真言宗となり、現在は気仙町金剛寺の末寺となっており、小林信雄氏が住職を務められている。主な建造物としては、本堂、観音堂、阿弥陀堂、牛頭明王堂がある。本尊である不動明王立像の他に、上述した十一面観世音菩薩立像、千手観世音菩薩立像、毘沙門天立像、阿弥陀如来坐像、薬師如来立像が安置されている。このうち、十一面観世音菩薩立像には縁起があり、大同2年（807年）に坂上田村麻呂が建立したが、寿永元年（1182年）に野火で焼失したため、これを建立したと伝えられている。この仏像は三十三年毎に本開帳、十七年目に中開帳が行われる秘仏である。

その他の文化財としては、観音堂の前に樹齢1000年以上と推定されている姥杉があり、1969年に岩手県指定天然記念物に登録されている。また、江戸時代に作製された二面の算学が伝えられ、その保管を陸前高田市立博物館に依頼していたが、今回の津波によって博物館が被災したため、現在は行方不明となっている。

3. 薬師如来立像の墨書について

6月に実施したファイバースコープによる調査によって、観音堂に安置されている薬師如来立像に墨書があることが見つかった。像の前面に直径2センチメートルほどの穴が開いており、そこからファイバースコープを差し込んだところ、背板内面と体部前面に墨書が見つかった¹⁾。

そこには、薬師如来立像の製作年と大願主、及び仏師が次のように記されていた。

① 製作年	天保十三年（1842年）
② 大願主	小友村肝煎及川庄兵衛
③ 仏師	邑上牛彦

小友村とは常膳寺がある場所である。常膳寺の観音堂前に置かれている狛犬の石像には、「願主世話人及川庄兵衛」と刻まれており、及川庄兵衛氏が実在の人物で、実際に小友村の肝煎であったことがわかっている。

常膳寺としては、狛犬だけでなく薬師如来立像の製作にも及川庄兵衛氏が関わっておられたということが初めて明らかになったということもあり、ご住職の小林氏が及川庄兵衛の子孫である及川庄八郎氏に連絡をとられたところ、早速おいでになり、インタビューを

させていただくことができた。

問題は、なぜ天保十三年という時期に、薬師如来立像を作ったのかということである。

そこで、調査を依頼された3名の方と及川氏を交えて、製作理由について協議を続けるうちに、及川征喜氏から幕末に発生した中吉丸の漂流事件との関わりがあるのではないかと

の示唆を受け、中吉丸についての調査を行うこととした。及川征喜氏はこれまでも中吉丸の漂流事件については詳しく調査をされているが、常膳寺の薬師如来立像との関連が見つかったのは初めてのことであり、氏によると中吉丸関連の資料は津波によって陸前高田市立博物館、図書館が被災したためにすべて失われてしまい、陸前高田市史に記載があるだけであろうとのアドバイスをいただいた。そこで、隣の大船渡市立図書館に向いて文献調査を行った。



薬師如来立像胎内の墨書

4. 中吉丸の漂流事件

天保十年（1839年）11月15日（太陽暦では12月21日）に、気仙郡小友村の商い船である中吉丸は、魚メ粕201俵、鯉節354箱、昆布248俵を積み込み、常州那珂湊（現ひたちなか市）に向けて出航した。船主は小友村の肝煎であった及川庄兵衛である。乗組員は船頭三之丞（55歳）、舵取勇治（45歳）、水主和吉（35歳）、同三蔵（35歳）、同徳松（35歳）、同清吉（35歳）の6名であった。

出帆から10日程たった頃、鹿島沖で大時化にあい、帆柱を切り倒し、積み荷を海中に投げ捨てることで転覆はまぬがれたが、太平洋に吹き流され方向を見失い、洋上を漂うこととなった。35日間の漂流の末、かろうじて見知らぬ島にたどりつき、九死に一生を得た。

この中吉丸の漂着先が小笠原諸島の父島であった。当時の小笠原諸島には日本人は住んでおらず、捕鯨船への物資補給を商いとしていた外国人が住んでいた。それらの島民に助けられ、二か月ほど過ごした後、船を修理した中吉丸は出帆し、3月24日に無事に銚子湊に着船した。小友浦を出港してから実に四か月半ぶりに、全員無事に帰国したのである。

しかしその後の役人の取り調べにおいて、外国人と接したことが問題視され、密航貿易の疑いで及川庄兵衛も江戸に呼び出されて九か月もの間取り調べを受け、島から持参した品物を没収した上で、全員が無事

に帰村できた。

漂流から16年目にあたる安政二年(1855年)に、船頭であった三之丞が自分の家の傍らに「船玉碑」を建立している。これは漂流中に助命を祈願した船玉様への感謝を表したものである。この船玉碑も大津波で被災し、現在は広田半島の琴平神社前に移されている。また、水主の清吉の母が清吉が死亡したものと思ひ、村人と共に「念仏百万編之碑」を建て供養したことが知られている²⁾。

この「船玉碑」、「念仏百万編之碑」に加え、今回の調査により常膳寺の薬師如来立像が中吉丸漂流事件とかわりのある文化遺産であろうと考えられるのである。

5. 小笠原諸島の歴史

小笠原諸島が発見されたのは、寛文十年(1670年)である。阿波国海部郡浅川浦(現海部郡海南町浅川)の船主で船頭でもあった勘左衛門ら7名が乗り組んだミカン船が、前年の11月15日に紀州の宮崎(有田市宮崎)で江戸へ送るミカンを積み込んで出帆したものの、遠州灘で遭難し漂流、翌年2月20日(太陽暦4月9日)に漂着したのが母島であった。当時の母島は文字通りの無人島であった。船頭である勘左衛門は亡くなるが、残りの6名は母島に50日程滞在し、その間に船をつくり、父島にも上陸した後、八丈島に到着し、帰国している³⁾。

このミカン船の生還者の報告から、幕府も探検船を派遣し、延宝三年(1675年)に父島に到着、36日間にわたって父島、母島など主な島々を探検している⁴⁾。

一方、ヨーロッパ人も東洋の崖に金・銀を豊富に産する島があるという伝説から、16、17世紀にスペインやオランダの探検船が、日本の近海に派遣されている⁵⁾。

ミカン船によって発見された無人島を最初にヨーロッパに紹介したのは、1727年に出版されたケンベル(オランダ商館の医師)が著した『日本誌』で、そこにはブネシマ(無人島)またはブネ(無人)の島と呼ばれていると記されている⁶⁾。

この無人島に漂着ではなく、人が定住するようになったのは、天保元年(1830年)6月である。マテオ・マザロ、リチャード・ミリチャンプという2人のイギリス人、ナザニエール・セボリー、アルディン・B・チャピンという2人のアメリカ人、チャールス・ジョンソンというデンマーク人と、名前がわかっていないハワイ出身の男女20名の計25名が父島に到着するが、乗ってきた船から2名のハワイ人と1名のアメリカ人が脱走して加わったことで、最初の入植者は28名になった⁷⁾。

彼らの入植の目的は、無人島近海でクジラを獲る捕鯨船相手の商売であった⁸⁾。当時は石油資源が発見されておらず、鯨油は貴重な商品であった。そのため、

イギリスやアメリカはまず大西洋で捕鯨を行い、大西洋のクジラ資源を破壊してしまう。その後アメリカは太平洋に進出し、日本近海にマッコウクジラの生息海域を発見し、ジャバングランドと名付けている。しかし、ジャバングランドはアメリカ本国との距離が大きいため、効率よく鯨油を集める方法としてアメリカ式捕鯨が行われるようになる。アメリカ式捕鯨とは、捕獲したクジラを船上で解体し、脂分の多い皮と骨の部分以外は海中に投棄し、それらを船上に設置した釜で煮て鯨油を取り、船内に積み込んだ樽が鯨油でいっぱいになるまで操業を続けるというものであった。そのため、捕鯨船に補給する薪や水、船員の食料を調達するために、小笠原諸島の位置は重要であった。

1853年にペリーが4隻の黒船で浦賀に来航し、幕府に開国を求めるが、その理由のひとつが、捕鯨船への食料等の補給と災害時の避難場所の確保であった。ペリーは浦賀に来航する一月ほど前に、父島に上陸している。ペリーは父島の二見湾で最も給水に便利な土地66ヘクタールを貯炭所用地として50ドルで買収し、セボリー氏にその管理を委ねるとともに、島民に自治政府をつくるよう勧告している。ペリーは捕鯨基地としてだけでなく、日本開国の前進基地として、また太平洋横断汽船航路の中継地として、さらに極東貿易の基地として、父島に注目していたようである。ペリーが去った後、島民の署名のもとにピール島(父島)植民政府が樹立され、セボリー氏がその長官に任じられている⁹⁾。

時代は前後するが、中吉丸が漂着したのは、セボリー氏らが入植して10年ほどの頃であった。

6. 中吉丸乗組員と島民との交流

船頭の三之丞らは島の様子を次のように報告している。

- ① 正月四日の夕方その島の入口に到着すると、間もなく島人4、5人が小舟二隻に乗ってやってきて、本船に乗り込んできた。(中略)言葉は通じなかった(中略)。間もなく足を縛った豚ブタやアヒルのような鳥を持ってきてくれたが、日本人には食べられないと固辞すると、今度は芋を持ってきてくれた(後略)。
- ② 島には人家が12、3軒あり、男女合わせて30人ほど住んでいた。
- ③ 島人の家に食べ物を貰いに行くと、どこの家でも惜しげもなくたくさん呉れる。実に仁慈の地である。
- ④ 島民は男女とも色が黒く眼中が赤く、女は特に色が黒い。衣服は柿色の木綿の筒袖を着ていた。
- ⑤ 他人の家を訪れる時「アローハ」と手をあげ、食物を懐中に入れて、オランダ文字の本を読みながら歩くのも平気である。

- ⑥ 道具では、火縄も使わず火を吹きだす鉄砲もあった。
- ⑦ 箸を使わずに、真鍮のヘラ（スプーン）や、簪に似た二股にとがったもの（フォーク）で、食物を突き刺して食べていた。
- ⑧ 茶ーてい。水ーおかわ。女ーめい。など。

また、乗組員の証言をもとに役人が描いた島民の生活風俗を表したイラストも残っており、興味深い。

二か月後の出帆の時には、島民が浜辺で手を振って見送ってくれただけでなく、船の中にキリスト教伝道書、ギヤマンなど色々な品物を投げ入れてくれた¹⁰⁾。

これらの品物は、江戸での取り調べがあったにもかかわらず隠して持ち帰られ、子孫に伝えられていたが、近年になって市立博物館がその保管にあっていた。水主和吉の子孫である上野文雄さんからキリスト教伝道書のコピーを見せていただいたが、今回の津波被害で失われてしまったのは、大変残念なことである。その伝道書にはナザニエール・セボリーの署名があったらしい。

7. 現在の陸前高田市と小笠原諸島との交流

中吉丸が漂着した島については、ルソン島説やハワイ島説などもあった¹¹⁾が、1968年2月に小笠原諸島がアメリカから返還されるにあたって、政府に招かれて東京に来られたジェリー・セボリー氏が「私の祖父が、たしかに日本の漂流民6人をお世話したと聞いています」とインタビューに答えた¹²⁾ことから、中吉丸の漂着地が小笠原諸島であったことが確実となった。

2010年2月には、乗組員の子孫や関係者が小笠原村を訪問した他、2010年5月には小笠原村教育委員会教育課長の佐々木英樹氏が陸前高田市を訪れ、乗組員の子孫と交流した。また、11月には、小笠原村ビジターセンターで小友浦船（中吉丸）漂着170年特別展が開催されたりして、交流が始まってきた。東日本大震災津波被害に対しても、小笠原村から支援の手が差し伸べられている。

今後、陸前高田市の稀有な歴史的事実である中吉丸漂流事件と小笠原島民との交流を、中吉丸の子孫や関係者だけでなく、陸前高田市民や子どもたちが共有していくことが課題であろう。

8. 学習活動の概要

以上の常膳寺の薬師如来立像の胎内墨書からつながっていった歴史的事実をもとに、小学校総合的な学習の時間における地域遺産を活用した持続発展教育の授業計画を作成した。6年生を対象としたのは、社会科学学習で日本の歴史を学んでおり、ペリー来航等と関連付けて学ぶことで、理解が深まると考えたからであ

る。

また導入において「なぜ、及川庄兵衛は薬師如来立像をつくったのだろうか。」という課題を設定することで、謎を解き明かそうという児童の学習意欲が高まり、地域の歴史や人々のつながりについて積極的な調査活動が行われることを期待した。

8. 1. 単元名

海を渡った中吉丸

8. 2. 単元の目標

- ・常膳寺の薬師如来立像の胎内墨書から地域の歴史に関心を持つとともに、地域を大切にしようとする心を育てる。
- ・小笠原村と陸前高田市の時間を越えたつながりから、持続可能な発展に関する価値観の一つである人と人のつながりの大切さを考える。
- ・中吉丸関係者等へのインタビューやインターネット、図書資料からわかったことを年表や図にまとめる。
- ・陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえ、交流の重要性を理解する。

8. 3. 評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現
① 中吉丸に関心を持ち、意欲的に調べる。 ② 地域の歴史に関心を持ち地域を大切に思う。 ③ 人と人のつながりを大切にする。	① 中吉丸に関わる人々の思いを考える。 ② 人と人がつながる上で大切な利他的行動を考える。
観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
① インタビューやインターネット、図書資料からわかったことを、年表や図にまとめる。	① 陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえる。 ② 交流の重要性を理解する。

評価規準

8. 4. 単元計画(全14時間)

主な学習活動	学習への支援	評価について
1. 常膳寺に行こう(4) ・ 常膳寺の仏像を見学し、和尚さんから、お寺についての話を聞く。 ・ 薬師如来像の胎内にある墨書の中で読める文字を探していく。	・ 地域遺産が守り、伝えられてきたものであることを押さえる。 ・ 墨書の貴重さや身近に見学できる貴重さを伝え、意欲を高める。	社会的事象への関心・意欲・態度①
なぜ、及川庄兵衛は薬師如来立像をつくったのだろうか。		
2. 中吉丸について調べる(4) ・ 中吉丸はどこに漂着したのか。 ・ 図書館やインターネットを利用し、中吉丸の漂流事件を調べる。 ・ 中吉丸の乗組員の子孫にインタビューし、漂流事件に関する感想を聞き取る。 ・ 中吉丸事件の意味を話し合う。	・ イラストを提示し、意欲を高める。 ・ グループで目的を決めて調べる。 ・ 事前に主な質問事項をまとめて相手に伝え、インタビューの仕方を指導する。 ・ 中吉丸事件の貴重さを考えさせる。	観察・資料活用の技能① 社会的な思考・判断・表現① 社会的事象への関心・意欲・態度②
3. 小笠原村との交流について(4) ・ 最近始まった交流に参加された方から、話を聞く。 ・ 東日本大震災津波の被災への小笠原村からの支援について調べる。 ・ 人と人のつながりについて話し合う。	・ 現在も交流している意味を考えることから、人と人のつながりについて考え、一人一人が現代の中吉丸として、様々な人とつながっていこうという意欲を高める。	社会的な思考・判断・表現② 社会的事象についての知識・理解①・②
4. まなびの交流(2) ・ 小笠原村立小笠原小学校に、現在の気持ちを伝える。	・ 自分たちから働きかけることの大切さを指導したい。	社会的事象への関心・意欲・態度③

9. 終わりに

本稿では、陸前高田市における文化遺産調査結果をもとに指導計画を作成した。今後、作成した指導案や資料を陸前高田市教育委員会に届け、市立小学校の総合的な学習の時間において授業実践していただくことで、陸前高田市の小学生に地域を大切にすること、人と人のつながりの大切さ、そのための利他的な行動力を育てていただければと思う。

まだ小笠原村での調査ができていないため、今後、小笠原村を訪問し、セボリー氏の子孫等にインタビュー調査を行い、指導内容の充実を図っていきたいと考えている。

注

1) 墨書の発見者は奈良教育大学教授山岸公基氏である。本稿の薬師如来立像胎内の墨書の内容は、山岸氏の解説によるものである。

- 2) 金野静一監修、陸前高田市史編集委員会編集、『陸前高田市史 第三巻 沿革編(上)』陸前高田市、1995年、pp.720-722、p.725、pp.727-728
- 3) 田中弘之、『幕末の小笠原』中央公論社、1997年 pp.2-7
- 4) 同上、pp.7-9
- 5) 同上、pp.15-18
- 6) 同上、pp.18-20
- 7) 同上、pp.41-42
- 8) 大熊良一、『歴史の語る小笠原島』南方同胞援護会、1966年、pp.38
- 9) 前掲注3) 田中、pp.93-94
- 10) 前掲注2) 金野、pp.722-725
- 11) 渡辺兼雄「中吉丸漂流始末記」東海新報、第11600号、1997年1月1日
- 12) 前掲注2) 金野p.729